個別論文

全体と部分の見直し

児玉徳美

Abstract

The whole is not always the mere sum of its parts. The whole may be a part of another larger whole and a part may be the whole of another smaller parts. It is not easy to define the upper limit of the whole and the lower limit of parts. The main object of this paper is to explore the relationship between the whole and its parts in linguistic activities and other human activities in order to construct paradigms to be shared by linguistics and social sciences. The following relationship is discussed : (1) relations between the whole and its parts in linguistic expressions , (2) mismatches between the whole and its parts or among the parts in linguistic analysis, (3) relations between linguistics and social sciences, and (4) relations between holism (or top-down approach) and reductionism (or bottom-up approach). In the conclusion the paper claims that human activities should be analyzed on the same footing in human and social sciences and offers some suggestions to integrate a body of knowledge and methodology accumulated by linguistics and other disciplines.

Keywords : 全体論，還元論，言語学，人文社会科学，統合

1．はじめに：問題の所在

全体は部分を集めることでできる場合がある。例えばジグソーパズルでは各ピースをつなぐことにより全体ができ上がる。部分のピースが１つ欠けても全体は完成しない。しかし多くの場合，全体は部分を単に集めるだけでは形成されない。例えば水は水素と酸素が化合して新たにつくられ，あらゆる色は原色の赤・黄・青を混合してつくり出される。ここでは部分間の特定の性質や分量が結合して，部分の形質と異なる新しい全体が形成される。また全体は他の多くの全体またはその部分と密接に関係しており，全体には全体の論理が働いている。その結果，「全体は部分の総和ではない」し，あるいは逆に「部分は全体から規定されるものではない」ということになる。改めて全体と部分がどのような関係にあるかが問われる。さらに全体はより大きい全体の一部であり，部分はより小さい部分の全体でもある。全体と部分は相対的なもので，全体の上限や部分の下限が明確なわけではない。各部分は自分より高位レベルの全体へ向けた顔と自分より低位レベルの下位部分へ向けたヤヌス（Janus）の顔をもっている。各部分は吉田（1998）が指摘するように，「部分でもあり全体でもある」という二重性をもち，複雑に絡み合うことにより全体がシステムを安定させている。

「総論賛成，各論反対」，あるいは逆に「具体策には賛成するが，全体の方向には反対」ということがしばしば起こる。中身を分析した場合，全体と部分の間で整合性がとれないためである。これは全体か部分のいずれかがまちがっているか，両者をつなぐ道筋が不明確なことによる。

人の意識・意図・主張などの思考過程が主要に言語の意味を介して行なわれるとすれば，意味のあり方が問われてくる。もちろん思考という心的過程はすべて言語化された意味によって支配されているわけではない。イメージ・感情・感覚などには語彙化されていない概念がある。その概念のなかにはいくつかの概念範疇をまとめる上位範疇や，逆に概念意味の原素とも呼べる原子的概念（または原素概念）がある。本論では語彙化されているか否かを区別せず，概念を含むものとして意味を考察する。概念意味のうち原子的概念意味は普遍的である。諸言語の異同はしばしば原子レベルの概念か，あるいは特定の値の原子が結合した複合原子である分子レベルかの違いかによって生じる。例えば水と過酸化水素は水素と酸素の同じ原子からなるが，分子レベルではH_2OとH_2O_2の違いがみられる。

かつての意味論では意味とは言語以前に独立して存在する事物や観念を指し示すとみなした。言語の意味を外在する世界と対応させ，その意味が世界において真であるか偽であるかが主要な関心であった。その後Saussure (1916) は言語の役割は言語から独立して外在する世界の事物や観念にラベルを張る名称目録であるとする言語観を逆転させた。例えば英語の単音節語であるhorseという言語記号は，すでに存在している特定の動物を指示する名称としてできたのではなく，cow, bearなどとの概念意味の違いを示すものとしてできたものである。つまり言語記号による名づけは概念の差異対立の関係に基づいて行なわれ，指示対象は概念の差異対立が画定された後にはじめて生じると主張した。

意味が差異対立の関係に基づいて画定されるように，全体と部分も多様な関係をなしている。現実世界を形成する要素や現実世界に生じる諸現象が全体を構成する部分でもあると同時に，それより下位類の全体でもあるだけに，諸要素や諸現象は一方ではその上位・下位レベルのものと縦の関係をもち，他方では同じレベルの全体どうし，または部分どうしと横の関係をもつ。全体と部分の間には多重の層が重なり合っている。諸要素や諸現象は無限ともいえる関係性の中で発生し，全体と部分の関係性そのものが絶えず外部からの影響をうけ変化している。それだけに，諸要素や諸現象を分析しようとする際，全体と部分のいずれを重視するかについて人により，または社会や時代により視点の違いが生まれてくる。

全体が部分より広い対象を表し，全体が究極の目標であり，部分がその過程をなすとすれば，理想と現実，目的と手段，長期と短期，視点の拡大と縮小などの対も全体と部分に対応する。それぞれの対は多様な関係性の中にあるため，その対象は固定したものではなく，どのような視点をもつかによって絶えず違ってくる。例えば言語分析が科学として厳密な形式化を進める目的をかかげ，その過程であいまいで捉えどころがないとして意味を分析対象から除外したり，語彙や文構造に分析対象を限定することもありうる。この場合，言語（活動）を構成する重要な要素である話し手の意図や談話全体の主張などを無視することになる。言語分析の本来の目的が言語活動を通しての相互交流のしくみを明らかにすることであるという観点からみると，「科学として厳密な形式化を進める」ことはその手段にすぎない。手段を目的化することにより

対象を狭めることは「内向きな」分析であり，興味ある課題から目をそらすことになる。全体と部分の関係性が複雑なだけに，できるだけ広い視点から全体を捉える必要がある。

20世紀は言語の世紀ともいわれ，人文社会科学では「言語論的転回」と呼ばれる動きが起こった。17世紀以降，精神は現実を映す鏡にたとえられ，知識はこの鏡に映る映像（現実）を表すとみられていた。この場合，映像である現実は，真理・理性・普遍性・客観性に読み替えてもよい。この知識を獲得するためにはいかに鏡をみがきあげるかが重要になる。言語の役割が名称目録であるとみなす言語観に基づいた，こうした近代の啓蒙主義的認識論はDescartes――Locke――Kantの系譜により構築されたが，20世紀にはこの伝統的認識論を放棄すべきという主張がWittgenstein, Heideggar, Deweyなどにみられる。いずれも従来の認識論によって得られたものが客観的な真実であることに疑問をもち，真理へ接近するためにはことばの真の意味を問い直し，ことばそのものに関心を向けていった。言語論的転回後の言説に共通していることは世界がことばで表現されるというよりも，ことばが世界を形成することになる。言語論的転回が生まれた要因としては，20世紀の文化的状況の変化とともに，Saussure (1916) に始まる近代言語学の確立が寄与している。言語の名称目録説を否定したSaussure (1916) は人文社会科学のモデルとなり，それを契機に社会現象を対象とする構造主義や記号論も生まれた。

筆者としては言語論的転回後の動向について以前から気になっている点が1つある。言語学と他の人文社会科学との乖離である。人文社会科学では「言語が自然的なものではなく，人為的で恣意的な差異の体系であること」や「言語が心理的・内在的なものではなく，社会的・外在的なものであること」（上野2001:i）を前提にし，「ある事象Xは，自然的／客観的実在ということより／ではなく，社会的に構成されたものである」（赤川2006:52）とみなしている。こうした主張では言語や事象の解釈が社会的産物である点を強調するあまり，「社会的産物」と種としてヒトが有する生得的な制約との関連性が捨象されている。確かにSaussure (1916) は諸言語の語彙は意味と形式が恣意的に結合したものであり，言語学が対象とするものは「社会的な約束事」であるラング（langue）であると規定した。しかしSaussure (1916:11-12) は言語を単なる社会的産物とは決して考えていない。言語体系を司り記号を支配するものとして，言語能力とも呼べるものの存在や，音声と概念が結合する際に脳内で働く心的過程を認めている。その後言語学は20世紀においてSaussure (1916) に続く2度目の革命も経験した。Chomsky (1957) 後の生成文法である。Chomskyは人間が生得的に備えている言語能力（competence）を明らかにし，普遍文法を構築することが言語学の最終目標であるとした。ここではSaussureのいう「社会的な約束事」も人間が生得的にもつ言語能力内の多様な要素の組み合わせによるとみなされる。今日，言語学は諸言語の普遍性と多様性が生得的能力と社会経験に由来することを当然のこととみなしている。その結果，言語は単に社会的産物とはみなされない。言語分析においては自然主義的アプローチがとられる。自然主義によると，分析対象としての人間社会は自然界の一部であり，人間は限られた特性をもつ生物であると捉えられ，分析対象として人文社会科学と自然科学の間に違いがあるにしても説明理論としては人文社会科学においても自然科学の一般的アプローチを放棄すべきでないと考えられている。生成文法のChomskyは一貫して自然主義の立場に立ち（Wilkin 1997参照），関連性理論を提唱しているSperber (1996) は文化を論じたものであるが，自然主義的アプローチを副題としている。生成文法と対立する認知言語学の

Lakoffは生得性よりむしろ経験（empiricism）を重視するが抽象的な概念意味や理性は身体的経験に基づいて形成されるとし，言語が種としての人間の身体的制約を受けていることを認めている。

「言語論的転回」という用語が用いられるようになってから約半世紀の間に，人文社会科学と言語学は独自の発展をとげてきた。人文社会科学はSaussure (1916) の社会的側面のみを受容し，Chomsky (1957) 後の言語についての分析を等閑視している。その結果，人文社会科学が世界の現象を社会的コンテクストの中だけで考察するのに対して，Chomsky後の言語学は人間の生得的・身体的要因を自明のこととして，概念や意味は客観的外部世界と同じく脳や肉体により形成されることを前提にしている。今日の言語理論が言語観や分析法において多様に分かれていながらも，一様に自然主義への親近性をもつのはこのためである。言語論的転回後の人文社会科学と言語学は皮肉なことに接近するどころかますます離反している。

(1) 心理学者・社会学者・人類学者・哲学者・言語学者がこれまで談話（言説を含む）の研究を進めてきたが，共通の記述用語がなく，共有される理論や方法論もなく，統合的で累積的な知識体系が構築される一連のパラダイムの研究も欠如している。上記の各学問が勝手に雑多なパラダイムを立てているため包括的（で統一的）な言語理論の実現がほど遠いものになっている。

30年ほど前にRussel (1979) は（1）のように嘆いている（詳しくは児玉（準備中）参照）。20世紀後半より研究は学際的になったとしばしばいわれるが，現実は必ずしもそうなっていない。少なくとも談話を対象にする分析においては30年前の状況が今も続いている。それぞれの学問は自分の世界に閉じこもり，用語・目標・理論を共有しようと努力しているわけではない。

これまでみてきた全体と部分の関係には，解決すべき課題として，概略，次のようなものがある。

(2) a. 分析対象として全体と部分の間にはどのような関係があるのか。
b. 分析方法として全体と部分のズレはなぜ生じるのか。
c. 言語学と人文社会科学の関係はどうあるべきか。
d. 全体と部分の整合性や相互関係はどうあるべきか。

(2a-d) をそれぞれ§2から§5で考察する。(2a, b) の分析対象と分析方法は相互に依存し，密接不可分の関係にあるが，あえてそれぞれを重点的に§2と§3に分けて扱うことにする。

本論の理解や批判・反論を容易にするため，前もって筆者の立場を明示しておく。

(3) a. 言語学は語や（隣接する2・3の）文の分析にとどまらず，分析対象を（言説を含む）談話にまで拡大すべきである。
b. 談話・言説を分析しようとすれば，形式よりむしろ意味の分析が中心課題となる。言語に埋め込まれている意味は生後に習得されるが，その意味は人間が有する生得

的能力に由来する言語知識と生後の社会経験を通して得られる言語知識からなる。

c. 言語（活動）が人文社会現象の一部であるだけに，言語学と人文社会科学が乖離していることは不自然であり，より多くの共通基盤をもつべきである。

（3a,b）は言語学が従来の枠を超えて言語（活動）の全体像に接近するための基本的視点であり，（3c）は本来，言語学と人文社会科学のあるべき姿である。

2．分析対象：全体と部分の関係

2．1　全体と部分の極限

言語分析における可視的な領域として最大のものは，ある時代や社会で発せられる談話（言説を含む）の全体であり，最小のものは諸言語（方言を含む）の音素（phoneme）である。目に見え，耳に聞こえる具体的な音素から談話に至る言語現象が何らかの秩序や体系を有するとすれば，言語表現には目に見えない不可視的な「力」が働いていることになる。

言語活動を通して人は命令・依頼・陳述・質問などをするが，その行為は単なる情報伝達や情報交換ではない。言語表現には一方では情報の伝達・交換の方法やスタンスのとり方などにおいて話し手と聞き手の社会的関係や対人関係が反映し，他方では現実世界についての不満・要求・主張・価値観などが伝達・交換される。言語活動，あるいはコミュニケーションは他の社会的行為と同じく社会文化的な相互行為であり，可視的な談話には不可視的な背景知識や信念体系などが埋め込まれている。不可視的な全体像を捉えようとして全体社会が想定される。しかし現実には社会または世界全体を見渡せる地点があるわけではなく，そのような位置についた者がいるわけでもない。全体領域を確定することは困難であるだけに，重要なことはそこにどのように接近するかである。逆に，可視的な言語表現のうち最小の部分をなす音素については，その特徴を示すさまざまな提案がなされている。可視的または不可視的な要素として音響的観点から弁別的素性（distinctive feature）や調音的観点から音韻素性（phonological feature）などがあるが，決定版といえるものはまだない。

脳科学の発達により「生物がもつあらゆる性質は遺伝子DNAに支配されている」という主張がときにみられる。確かに生物のうちヒトについてみれば，人に固有の言語能力，心臓血管系，眼や皮膚の色はもとより，病気や宗教信仰までが遺伝子によって引き起こされているかにみえる。しかし生物のすべての性質や機能や能力を究極の部分である遺伝子に還元することはできない。遺伝子には生物体の多様な性質・能力などの違いが不完全にしか書かれていないためである。例えば人間とチンパンジーでは活動している遺伝子の98パーセントが同一とされるが，ここから生まれた両者が似ているとはいいがたい（もっとも，見方によっては似ているともいえる。重要なことは両者の異同の要因を明らかにすることであろう）。また生物が外的の抗原に合わせて抗体をつくるが，抗体遺伝子により体細胞がどのように変異するかは現在研究の緒についたばかりである。脳は遺伝子をあやつる器官であり,心の器官でもある。しかし脳と心の間には大きなギャップがあり（児玉2006:19-21参照），心脳問題と遺伝子の関係についても今日明らかなわけではない。少なくとも現段階で生物の性質や行動は遺伝子だけでは決定されない。

言語問題についていえば，音素から談話に至るすべての言語表現やその背後で働いている不可視的な原理がすべて遺伝子に支配されているとはいえない。

言語活動をあやつる不可視的な要素として全体や部分を確定することは不可能である。全体や部分の極限を特定できないにしても，言語がどのように発達したかについてその決定要因を仮定することはできる。Fujita (2007) はChomskyの最近の提案に従い，言語発達の決定要素として次の3要素を紹介している。

(4) a. 遺伝子
b. 環境
c. 構造組織の一般原則

(4a-c) は大まかな決定要素であるが，偶発的に生まれた言語表現はともかく，諸言語の発達の多くは (4) によって説明される。諸言語は (4b) により記号として形式（音声）と意味が恣意的に結合し,多様な構造を有し，時間の経過とともに変化しているが，その多様性は無限に広がっているわけではない。諸言語は (4a) により多くの普遍性を有し，(4c) により多様性には多くの制約がある。例えば99パーセント以上の言語では通常の語順で主語が目的語に前置しているが，これは主語が文中で記述される出来事においてしばしばエネルギー移動の出発点をなしており，発話で常に最も強い焦点をあてられる図（figure）の役割をはたしているためである（図と地について詳しくは児玉1987b:64参照）。またどの言語においても例えば事物の数・定性・総称的か特定的かなどの区別は名詞句で表されるが,事物の色彩を示す形態素が名詞につくことはないし，出来事が起こったのが昼か夜かの違いを示す動詞が存在するわけではない（児玉2006a:42参照）。言語表現のこのような普遍性や制約はヒトの認知能力一般や思考過程とも関連している。

(4a-c) は個人や言語共同体社会が言語（母語）を習得・獲得する過程にもそのまま適用される。これは当然のことである。言語の語り手である個人や言語共同体社会が習得・獲得する母語は (4a) により無限の広がりに制約を課せられているにしても，(4b) により多様に変化する。(4b) の環境とは地域・時間だけでなく,それぞれの文化状況を含むものである。個人の一生においても社会の歴史においても言語知識は時空において変化し，言語表現に埋め込まれている背景知識や信念体系なども変化していく。(4c) により言語の普遍性と多様性，さらには言語変化の過程を明らかにすることが言語学の課題といえる。

2.2　全体と部分を構成する要素間の対応関係

言語表現がどのように構成されるかについては大きく2つの見方がある。

(5) a. 構成素関係：音素→形態素→語→句→文→（段落）→談話
b. 依存関係：文内においては語と語，談話内においては文（または段落）と文の主従の関係

１つは（5a）のように個々の構成素（部分）を組み合わせてより大きい単位の構成素をつくり，全体に至る構成素関係であり，あと１つは（5b）のように文や談話の全体が語や文の部分どうしが形成する主従の依存関係である。前者は全体と部分に基づく縦の関係であり,後者は部分と部分に基づく横の関係である。母語話者は縦・横の関係が言語表現を安定させる上でどのように構成形成されるかを直感的に知っており，文法はその直感的な言語知識を説明するものである。

言語は形式（音声）と意味が結合したものであり，形式と意味は部分から全体に至るあらゆる領域で結びついている。形式と意味は，かつてSaussure (1916) が言語記号として恣意的に結合したものであるといっていることからもうかがえるように，本来互いに独立したものであり，必ずしも１対１で結合するわけではない。形式は言語活動において意図や思考を伝える手段である表現様式であり，伝えられる意図や思考の内容に直接関係するものではない。しかし現実には両者に多くの類似性がある。なぜなら形式の目的は意図・思考の表現を可能にすること,つまり意味の表現を可能にすることにほかならないためである（Tesnière 1959:42参照）。そこで言語構造は形式を組み合わせる原理と意味を組み合わせる原理をできるだけ対応させようとする。しかし無限ともいえる意味を有限の形式で表現するためには１対１の関係はありえない。形式と意味は言語という全体を構成する異なるレベルの部分であるだけに，両者の間には一貫した関係とともにしばしば不整合なミスマッチが生じることになる。

本節では主として形式と意味のズレをみていく。次例はズレの一端にすぎない。

(6) a. The family consists of five persons. vs The family are all early risers.
　　b. The wheat is in the barn. vs The oats are in the barn.
(7) a. go to school [church]
　　b. go to (the) market [university]
　　c. go to * (the) theater [shop].
(8) a. ?A box is empty. vs A box was empty.
　　b. A box is a container. vs *A box was a container.
(9) a. Mary tried (to start her car) in the morning.
　　b. Mary attempted * (to start her car) in the morning.
(10) a. John gave a book to Mary. vs *John gave a book.
　　b. John gave a lecture to the academy. vs John gave a lecture.

（6a）では形式上単数のfamilyが意味に応じて単数にも複数にも用いられているが，（6b）では意味上類似のwheat（小麦）とoats（カラスムギ）が形式上単数と複数に分かれている。（7a-c）の名詞はそれぞれその本来の役割をはたす場所を示しているが，定冠詞theのつき方が名詞によって異なる。通例（7a）はtheを省略し，（7b）はtheをつけてもつけなくてもよいが，（7c）はtheを省略すると不適格になる。（8a,b）の（不）適格性は時制の違いに応じて対照的であるが，単数可算名詞句主語のboxが総称的か特定的であるかとともに,述部がその名詞に共通の類の意味特性を述べているか否かによって決定されている（詳しくは安井2004:2-3参照）。（9a,b）はto

不定詞省略の可否が動詞のtryとattemptで異なることを示し，（10a,b）は間接目的語省略の可否が動詞giveの意味によって異なることを示している（用例（9）（10）はPustejovsky 1995:11による）。意味と形式のズレのなかには慣用的に不整合を示すもの,あるいは意味上の違いが形式に影響を与えたり,形式上の制約から意味の違いが部分的に示されるなど,多様なズレが存在する。Pustejovsky (1995) やFrancis and Michaelis (2003) は意味が形式に写像できない領域が多数あることを詳しく論じている。

形式と意味は恣意的に結合しているだけに，言語によって両者の結合が違ったとしても不思議でない。ここでは日本語と英語を比較してみよう。

（11）a. 客　vs guest, visitor, patient, customer, client
　　b. practice vs　実行（する），慣行，業務，開業（する），練習（する）
（12）a. run　vs　走る，走って行く,逃げる，競走する，流れる，動く；走らせる，流す；走ること…
　　b. water vs 水，水溜り，水中，水域，海域，体液；水をまく，給水する…
（13）a. 日本語：対象依存性，文脈依存，出来事の状況などを重視
　　b. 英語：観念形成機能，高次表意，出来事の因果関係などを重視
（14）a. あなた，君，お前　vs you　／　敬語の有無
　　b.「こ・そ・あ」の三分法　vs this―thatの二分法
　　c. 喜ぶ　vs　be delighted／　驚く vs　be surprised ／　太郎は戦死した。 vs　Taroo was killed in the war.
　　d. 太郎は紙を燃やしたが，燃えなかった。 vs　*Taroo burned the paper, but it didn't burn.
　　e. 太郎は鉄をハンマーで打って平らにした。vs Taroo hammered the metal flat.
（15）a. 率直に＊（言って），手伝えません。vs Frankly, I can't help you.
　　b. 奴がこっちへ来る＊（よ，ぞ，ね，さ）。vs He's coming toward us.
　　c. 太郎がコップを落とした＊（ので），コップが割れた。＝コップが割れた。太郎がコップを落とした＊（のだ）。　vs　Taroo dropped the glass.　It broke.=The glass broke.　Taroo dropped it.

（11a）の日本語では「訪ねてくる人」は誰でも「客」となるが，英語ではどこを訪ねるかによって呼称がそれぞれ異なる。逆に（11b）の英語practiceの意味は日本語では異なる語または句で示される。多くの場合，英語は（12a,b）からうかがえるように，語義の拡大が日本語よりはるかに広範囲にわたり，１語が複数の品詞にも用いられ多義性に富んでいる。多義性の違いが概念の濃淡や思考過程に直接影響するわけではない。英語が１語で表すところを日本語では異なる語や句あるいは接辞で意味や品詞の違いを表すにすぎない。もっとも現実世界のどの領域を重視するかは言語によって異なる。一般に日本語と英語はそれぞれ（13a,b）を重視する。日本語が（14a）の対称詞や自称詞が豊富で敬語を発達させ，（14b）の三分法をとるのも，（13a）の対象依存性や文脈依存に敏感なためである。また日本語は出来事を状況中心に記述し，（14c）

のようにしばしば自動詞構文をとる。これに対して英語は出来事の因果関係に敏感であり，原因となるもの（動作主など）とその影響をうける対象や事態を表すためしばしば他動詞構文をとる。（14c）の英語が受身形であるのも事態の原因や動作主が暗に意識されているためである。因果関係に鈍感な日本語は英語と違ってしばしば行為が結果を含意しないため（14d）が可能であり，結果を示すためには（14e）のようにその動詞が改めて必要になる。英語は（13b）の観念形成機能に敏感なため文中で性・数・時制を明示する。さらに言語表現された「基本表意」の論理形式の発展として「高次表意」（higher-level explicature）を多用する。この使用は英語の語義を豊かにする一因にもなっている。関連性理論で提唱されている高次表意とは言語表現されないが，say, yellなどの言語行為動詞や believe, regretなどの命題態度動詞が文に埋め込まれていると解釈されるものである。多くの場合，日本語では高次表意が含意されず，（15a）の（　）内の言語行為動詞や（15b）の（　）内の告知・警告・確認・予想などの終助詞を明示する必要がある（詳しくは児玉2002:162-164参照）。文と文をつなぐ場合も，日本語では（15c）の（　）内のように，２文の関係について話し手の意図を明示する必要があるが，英語では高次表意が働き，２文の語順を逆転しても因果関係が示されることになる

英語は明示的であり，日本語はあいまいであるとしばしばいわれる。言語表現で何を語るかという問題はともかく，言語として英語が日本語より表現様式において明示的であるとは必ずしもいえない。英語は１語が多義を有し，そのいずれの意味に用いるかは共起する語との関係で決定され，さらに言語表現されない高次表意をコンテクストから判断しなければならない。高次表意は命令文やアイロニー表現などで話し手の意図が字義通りに解釈されない場合にも重要な役割をはたしている。表現様式が明示的であるか否かは一概に論じることができない。あいまいであるか否かにおいて最も重視すべき点は表現形式ではなく，むしろ話し手の意図や主張を盛り込む談話や何を語るかの話し手の伝達態度にある。

言語は時間の経過とともに変化し，形式と意味の結合のあり方が変化していく。OED (1933) は悪態語（swearing）のdamnedの初出例にShakespeare (1596) をあげ，「今日では通例 ‘d___d’ と印刷される」としてFielding (1830) やThackeray (1848) から‘d___d’の用例をあげているが，現代では日常生活で頻用され，それを用いたからといってそれほど咎められることもなく，印刷では通例damnedと綴られる。かつて日本語では漢字の多用は男性の書きことばの特徴とされ，明治時代までは使用漢字の多寡によって書き手が男性か女性かを判別できたが，今では全く不可能である。今日なお話しことばで残る男ことばと女ことばの区別もそう遠くない将来に消失すると予想される。

かつてGeorge Steiner (1967) は「夜のことば」（Night Words）の章で色情雑誌から文学的な装いをもつ作品に至るまで夜のことばである性表現が氾濫していることを嘆いていた。夜のことばを明るみに出すことはプライバシーを崩壊させ，新鮮な思考や刺激に対する受容力や想像力を減退させ，ことばへの軽やかな軽蔑を通してことばそのものを無力化しているという。今日では絶え間ない性的暗示は広告の中でも消費されている。

（16）Part of the art of being a woman
　　is knowing when not to be too much of a lady.

（女（woman）であることの術のひとつは淑女（lady）でありすぎない時を知ることである。）

（16）は1980年代に出た米国のある化粧品会社の広告である（Brϕgger 1992:74参照）。広告文の上には半分透けたドレスを着てにっこりほほえんでいる美人モデルが写っている。ここではwomanとladyの含意の違いを巧みに利用している。 womanは本来生得的なものであるが，自らを魅力的にするにはladyでありすぎない術が必要であるという。このコピーの背後には女性はその性だけで女性とみられるのではなく，他人がそうと認める性のイメージや容姿に自らをつくり上げていくことが大事であるという価値観が隠されている。性差別を再生産しているか否かはともかく，このような広告文が受容されるのは現代の豊かな欧米社会や日本などに限られる。世界の多くの地域では通用しないし，欧米や日本でも100年前には通用しなかったであろう。

20世紀に入って以後，ことばのスピーチ・レベルがformalからinformalなものへと下がっている。つまり，かしこまったことばから「ふだん着」のことばへ向かっている。その過程でかつては語らなかった「夜のことば」が公的に語られるようになったのかもしれない。われわれは日常生活でことばの波にさらされており，ことばがわれわれの思考に与える影響をあまり自覚していない。Steinerが感じた夜のことばの氾濫は性愛の世界が20世紀後半に根本的に変容したことの反映でもあろう。そのことが性以外のことばや社会領域，あるいは思考過程とどのように相互関連しているかを明らかにすることも今後の課題となる。

ことばの全体像に接近するためには，語られた言語表現のみを対象にしたのでは十分ではない。人は何を語り何を語らないかを見極める必要がある。人は語りたいものだけを語り，語りたくないものには口をつぐみ，見たいものだけを見て見たくないものには目を閉ざす傾向がある。その結果，人により語る内容が異なり，見る光景が違ってくる。これは個人に限らない。言語共同体社会はそれぞれ固有の「言説の秩序」を有している。ヨーロッパ人が中東を論じる言説や中東を見る眼差しにはSaid (1978) のいう「オリエンタリズム」の様式があり，日本（語・人）には語る様式だけでなく，語る内容においてもあいまいさを特徴とする「言説の秩序」がみられる。この問題について詳しくは児玉（2006）を参照されたい。

2.3　視点による違い

世界の全体が目に見える実体として与えられているわけではない。それだけに人または社会は目に見える局所的な部分をみて，あるいはその背後にある抽象的な原理から判断して自らの言語観や世界観を形成していく。

言語分析の歴史においても古代ギリシャから20世紀初期の歴史比較言語学に至るまで，目に見える外的形式を対象にした音声学的・形態論的分析が中心であった。言語が不可視的な差異対立に基づく構造をなしていることはSaussure (1916) によって初めて明らかにされ，その後，語と語の結びつきを扱う統語論の自立性が確立したのは20世紀後半になってからである。Chomsky (1957) や Tesnière (1959) の偉大さは形態論的統語論から統語論を解放し，言語分析の重要度において統語論が形態論に優先することを実証したところにある。要するに，視点の違

いによって，ものごとの重要度が異なり，分析対象も違ってくる。

言語学は歴史的に論理学と密接な関係にある。特に意味論では意味ある命題（＝文）が真か偽かを問う論理学の影響が強い。日本語文法では古くから詞と辞が区別されており，前者は名詞・代名詞・形容詞・副詞など客体表現を表すものであり，後者は助詞・助動詞・接続詞・感動詞など主観的判断を表す表現である。関連性理論でも詞と辞にそれぞれ対応するものとして概念的コードと手続き的コードが仮定されている（詳しくは内田2007参照）。いずれも前者は文あるいは発話の真理値に関与するが，後者は真理値に関与しないとされる。真理値は言語学で意味論（semantics）と語用論（pragmatics）を区別する指標にされることもある。例えばGazdar (1979:2) は発話された文の真理条件を扱うのが意味論であり，発話の意味のうち意味論が対象とする意味を引いたもの，つまり真理条件で直接説明できないものを扱うのが語用論であるとした。もしこの規定に従うなら，意味論の対象は極めて限定されてくる。なぜなら真偽判断の可能性（veridicality）を問えるのは断定の肯定文のみであり，条件文・疑問文・命令文，あるいは意図や願望などを示すモダリティなどは除外されるためである（例えばZwarts　1995参照）。真理条件意味論は論理学の影響から脱出できず，言語と現実世界との間の真理値にこだわってきた。こうした閉塞状況は今日の意味論や語用論にそのままあてはまる。文や隣接する２・３の文のみを分析対象とし，話し手の姿が見えてこない。発話で語られるもののうち，現実世界との関係で真か偽かという真理値が問われるのはその一部にすぎない。例えば理想と現実，目的と手段を論じる場合，現実を正確に捉えることは重要であるが，むしろより重要なことは現実を変えていく，あるいは現実を維持する論理的な手順である。そこへ迫ることは言語学だけでできるものではない。しかしそこへどのように迫るかについて言語分析のあり方への示唆があってしかるべきであるが，言語学にはそのための用意がまだ何もできていない。

言語は歴史的に変化していくが，言語の全領域が一律に，あるいは無原則に変化するわけではない。言語のどの面が何の影響を受けて変化し，何が変化しないかを峻別する必要がある。個人が母語の言語構造に対してもつ言語知識の多くは非歴史的なものである。Saussure (1916) が言語の通時態と共時態を区別したのもそのためである。過去の歴史的経過を無視して母語を習得していく。その後Chomskyはそうした母語習得を可能にするのが人間に生得的にそなわっている言語能力であるという。だからといって，個人が言語の歴史的変化と無縁になるわけではない。個人は言語共同体社会の中で生きており，社会において形成される母語構造や言説の秩序の影響をうけている。言語構造や言説の秩序は時間の経過の中で形成され，文化的・社会的な影響をうけている。問題は影響の中身である。社会が必ずしもそのまま言語に反映しないように，歴史が直接言語に反映するわけではない。歴史学は過去を掘り起こし客観的事実を積み重ねながら社会の全体像に迫ろうとするが，その過程がすべて言語に反映するわけではない。過去の文化的・社会的影響が言語構造や言説の秩序のどの面に現れているかを正確に知るためには，言語学と他の人文社会科学との連携が必要になる。

3．分析方法：全体と部分のズレはなぜ起きるのか

3.1　全体論と還元論

現象を効率よく説明するためには，できるだけ多くの現象に適用できる原理原則を探っていく。その目的を達成するためには原理原則には抽象化や簡潔性が要請される。原理原則の立て方として大きく2つの方法がある。1つは全体がそれを構成する基本要素（部分）に置き換えられるとみなし，部分から全体へ向かって全体がしかじかの部分からなるとする還元論（reductionism）であり，あと1つは全体は他の全体や部分とつながり，単なる部分の総和ではないとみなし，全体から部分へ向かって部分は全体のしかじかの特性から派生するとする全体論（holism）である。

還元論は特に自然科学において早くから採用されてきた分析法である。還元論にはP.カタラーノ（1998）が指摘するように，構成還元論（または存在還元論）と理論還元論の2種類がある。前者は現代の素粒子論のように，これ以上分割できない最小の物質に還元化するもので，「原子論」（atomism）とも呼ばれる。後者はすべての概念をただ1つの包括的な理論によって説明しようとするものである。一方，全体論は遅れて生まれてきた分析法である。柴田（1997:370）は全体論を次のように位置づけている。

（17）全体論とは，還元論に対抗するための一つの砦である。…人間に特有と思われる現象，とくに言語・文化・宗教・社会・経済・伝統といった「高次」の現象がそれより「低次」の現象を構成する要素と法則によっては完全には説明されえない，という反還元論の思想として，いわば（自然）科学主義に対する人文主義の防衛線を形作るものであった。

全体論は人文社会科学でしばしばみられるが，人文社会科学の専売特許ではない。自然科学においても，H．ホライス（1998）が紹介しているように，還元論と反還元論の論争がみられる。

具体的にことばの意味について考えてみよう。すべての意味が還元論や全体論の一方で説明できるわけではない。かつてBloomfield (1933:20,139) は言語について有益な一般化は帰納的一般化のみであるとした。例えば英語のsaltは科学的知識を利用して「塩化ナトリウム sadium chloride (NaCl) 」と正確に定義できるが，love, hateなどの語を定義できる正確な方法がなく，今はまだ有益な一般化のできる時期ではないとした。確かに全体のsaltはナトリウム（Na）と塩素（Cl）の部分に還元できる。しかしこれはsaltという物質の物理的なミクロ構造を示すものにすぎない。日常生活で用いられる Pass me the salt, please.（(食卓で）塩を取ってください），Humor is the salt of his story.（ユーモアは彼の話をますますおもしろくする）でのsaltは科学的知識の定義と無関係である。むしろ香辛料や「刺激を与えるもの」としてのsaltの機能や役割が問われ，saltの意味は文脈と関連してくる。文脈への考慮は全体論に直結するものではないが，還元論でうまく説明できるものでもない。

概念意味はどこから生まれるのかという問題がある。意味が現実世界での経験を通して習得

されるとする経験論によると，多くの概念意味は原素的概念が複合したものとみなされる。例えばbachelorとunmarried manはどちらも UNMARRIED MAN を表し，同じ概念を示すことになる。triangleという語の意味は線や角度の原素概念を組み合わせて説明される。通例原素概念は自然言語で語彙化されているもの，あるいはそれより小さい概念である意味素性（semantic feature）によって示される。これに対して多くの概念意味は環境での感覚や刺激によって学習されるのではなく，むしろ生得的なものであるとする生得論がある。経験が違っても原素概念や複合概念が変わらないのはそのためであるという。もちろん経験が不要ということにはならない。生得的なものを誘引する限りにおいて経験も関与する。生得論によると，概念は経験に先立って存在し，子供はすでにもっている概念に対してラベルを見つけるだけである。ここではほとんどの語彙概念が内部構造をもたず，bachelor, triangleの複合概念やそれを構成する原素概念も等しく生得的なものとみなされる。「ラベルを見つける」という点では§１でSaussureが否定した名称目録説と似ている。しかし名称目録説での言語の役割は外在する事物や観念などにラベルを張ることで概念意味が確立するとみなされていたのに対して，生得論では概念意味が経験に先立って人間に埋め込まれているという点で大きく異なる。Fodor (1981:315) は最も徹底した生得論者であり，語の意味が定義不可能であると考え，Fodorほか（1980）でも「定義に反対」（Against definition）という論を展開している。ほとんどの語の意味が生得的で分割不能な原素概念であるという点，原子論の代表といえる。Chomsky (1987) も辞書において語の定義が不正確でも十分目的を達しているのはわれわれが生得的な概念組織をもっているためであるとしている。

言語理論は概略どのような立場に立っているのであろうか。今日，生成文法のミニマリスト・プログラムは複雑な文法操作や原理群を徹底して因子分解し，生得的な言語能力の単位を最小化するため，語や文を生成・派生する基本単位として素性（feature）を設定しており，原子論（構成還元論）的である。関連性理論は語用論理論として多様な情報のうち最小の処理能力で最大の文脈効果を生むものが最も適切であるとして談話の（不）適格性を決定している。文と文，あるいは文とコンテクストの関連性や言語活動で働く推論のメカニズムを１つの原理で説明しようとする点，理論還元論的である。認知言語学は生成文法と対立し，一般的な認知能力から独立した自立的なモジュールとしての言語知識を否定している。言語知識は生物の延長である人間の五感・運動感覚・イメージ形成・視点の投影などの身体的な動機づけを背景として現実の経験を通して習得されるとみなして認知能力とかかわる言語構造の諸原則を設定している点，全体論的といえる。

還元論と全体論は部分的に自立論と（相互）依存論，モジュール論と非モジュール論に対応する。しかし全体論，還元論はさまざまな分野であいまいに用いられ，その定義は必ずしも確立したものではない。例えばGrice (1989:351) は時に還元論的と批判されるが，自分はこれまで還元論を支持したことはないという。確かにGrice (1975) の提唱する語用論は多様な文脈情報の中で第１次原理として「会話の協調原則」を立て，それを具体化する第２次原理として４つの公理，さらにはそれぞれの公理の下位類を仮定している点，むしろ全体論的であるとみなされる。

全体論か還元論かにあいまいさがあるにしても，同じ言語を対象にしながら分析法に大きな

違いがあることは否定できない。このような違いがなぜ生じるかについて次節で考察する。

3.2　なぜ視点や原理原則に違いが生まれるのか

§2.3でみた視点や§3.1でみた分析法としての原理原則が異なることにより，全体とそれを構成する部分との関係が違ってくる。問題は視点や分析法がなぜ異なるのかということになる。これは究極的には，言語が恣意的に結合した形式と意味の合成物であることに由来する。言語が合成的であるということは要素還元的に聞こえるかもしれない。しかしここで「合成的」というのは，全体が部分の普遍的な原素やその組み合わせによりボトムアップ式に組み立てられることがあることを否定しないが，全体を介して部分がトップダウン式に変わることもあるとするものであり，全体と部分の相互関係やゲシタルト的観点も必要であるとする立場である。これはJaszczolt (2005:10) に似た立場である。ここでは視点や分析法に違いをもたらすものとして3つの要因を考察する。

第1は形式と意味のいずれを優先するかの違いによる。言語表現として (6) - (15) にみられる形式と意味のズレは同一言語においても異言語間においてもいずれを重視するかの違いによる。言語理論においても§3.1でみたBloomfieldは言語学が「科学」であるためには客観的に判断可能な規準を必要とし，今のところ意味はその基準を満たさないとして意味はほとんど分析対象とならなかった。その後の生成文法でも統語論の自立性を強調し，意味はその解釈的なものとみなされ，意味論にはほとんど進展がみられない。意味を扱う意味論や語用論にしても，§2.3でみたようにこれまで真理値にこだわったため，あるいは統語論優先の波を受けて談話全体を対象にする分析にまで至っていない。言語活動での主役ともいえる意味がこれまで等閑視されてきただけに，21世紀は意味分析の遅れを取り戻す必要がある。意味を軸に言語を分析しようとすれば，話し手の意図や主張・価値観などが埋め込まれている談話が主要な分析対象となるであろう。

第2は全体と部分の関係にある。まず次文の意味を検討してみよう。

(18) The plane taxied to the terminal.

英語のplane（かんな，平面図），taxi（タクシーに乗る，水上を滑走する），terminal（終着駅，コンピュータの端末）はそれだけ取り出せばそれぞれ（　）内の語義も有し，多義であいまいであるが，ここでは通例「飛行機は誘導路にそって空港ターミナルへ向かった」の意味に解釈される。この解釈に至るまでには，文の意味を論理的に辻褄の合うものにするため，各語義の組み合わせを現実世界の知識と突き合わせながら，仮説的推論（abduction）を働かせている。文の意味は文を構成している語の意味，文の構造，現実世界の知識，推論などによって決定され，その決定過程には人のあらゆる言動を支配している最適原則（best-fit principle）が働いている。要するに，全体と部分が交錯しながら（18）の解釈を決定している。言語理論においても全体と部分のいずれに焦点をあてるかによって分析法が違ってくる。全体と部分を可視的な言語表現に限っても，（5）で示した全体と部分の構成素関係を重視する構成文法（constituency grammar）や部分間の依存関係を重視する依存文法（dependency grammar），あ

るいは構文を重視する構文文法（construction grammar），語の意味を重視する語彙意味論（lexical semantics），談話を対象とする談話分析（discourse analysis）などの違いがみられる。

第３は原理原則のいずれを重視するか，あるいは原理原則をどの範囲まで適用するかの違いにある。例としてまず語順を決定する要因を考察してみよう。文において日本語は一貫して主要素後置の原則を守っている。しかし英語や中国語では主要素が従要素に前置したり後置したりする。英語ではむしろ主語・目的語などの文法関係や動詞・前置詞・冠詞などの品詞が重要な役割をはたし，中国語では既知情報であるか否かに関連する写像一貫性原則などの意味を重視している。ところが談話内での文と文の依存関係は前の文に応じて後の文が展開するとみるならば，すべての言語が主要素前置の原則を守っている。その結果，依存関係を重視する日本語では文内は主要素後置であるが，談話内では主要素前置という逆の語順を取ることになる（詳しくは児玉2007参照）。Grice (1975) が提案している公理の１つに量の公理がある。この公理は（１）「必要なだけの情報を与えよ」と（２）「必要以上の情報を与えるな」の２つに下位区分されている。一見矛盾した公理にみえるが，（１）が聞き手の論理であり，（２）が話し手の論理である。いずれも高次の原則として人間のあらゆる行動に貫いている「最小労力の原則」（principle of least effort）に従っている。つまり話し手としてはことばを用いる労力を倹約して１語で多くの用を足したいと思い，逆に聞き手としては解釈する労力を倹約して理解しやすいように詳しく話してほしいと思っている（詳しくは児玉2006a:61参照）。ただし「必要な情報」と「必要以上の情報」の区別は必ずしも固定的なものではない。話し手と聞き手の間柄や聞き手の人数などの場面によって変化する。その状況は暗黙のうちに話し手・聞き手に共有されており，状況を読み間違えたとき「説明不足」とか「くどい」として非難される。諸言語にみられる，生得的な言語能力に由来する普遍性と生後の言語共同体や社会経験に由来する多様性においても原理原則の適用範囲の違いによってその現れ方が違ってくる。

どんな分析においても抽象化や簡潔性が要請されるが，その過程で特定の全体や部分を強調するあまり他を捨象する危険がある。言語分析は一方で形式と意味の対応関係や全体と部分の交差や原理原則の適用条件・適用範囲を明らかにしながら，他方では諸言語の普遍性と多様性を区別する必要がある。そこで最も重要なことは，できるだけ原理原則に一貫性をもたせながら全体と部分の整合性をいかにはかるかということになる。

３．３　従来の分析の問題点

言語分析に対する筆者の立場は§１末尾の（3a-c）で述べた通りである。本節は（3a,b）にそって分析対象の拡大とともに分析方法のあり方について意味論と社会言語学の問題点を論じ，次節は（3c）にそって言語学と人文社会科学との関係を考察する。

まず意味論からみてみよう。ここでの意味論は広義に用いて語用論などの意味分析も含むものとする。これまでの言語学は論理学や統語論優先の影響をうけて文または隣接する２・３の文を最大の分析対象とし，言説を含む談話の分析にまで至らなかった。統語論とすれば談話は形式上文を積み重ねたものであり，文を最大の分析単位とすることにそれほどの問題は生じない。問題は統語論の影響をうけて意味論までが狭い分析範囲にとどまり，談話を対象にしていないことである。言語活動は話し手の意図・主張・価値観などの情報を伝達するものであるが，

この情報は通例（隣接する２・３の）文で伝えられるものではない。談話を対象にしてはじめて理解が可能になる。言語とは形式と意味の結合したものと規定しながら，言語学がこれまで考察した意味は言語活動の意味の一部にすぎない。

談話はジャンル（韻文か散文か，物語文か描写文か説得文かなど），話題領域，対話者の関係，使用言語の媒体（話しことばか書きことばか，前もって用意したのか即興のものか）などによって伝達の様式が異なる。談話分析としては伝達様式の違いを明らかにすることも１つの課題であるが，最も重要なことは伝達されるメッセージの中身である。つまり談話で何を伝えるか，メッセージの内容をいかに生成理解するかである。意味論はこれまで談話の中心課題をほとんど扱ってこなかった。

話し手が伝える思いは個人の主張とみなされるが，個人も言語共同体社会の一員である。言語共同体社会は時間の経過の中で何をどのように伝達するかについての様式をつくりあげている。つまり伝達方法と結合して何を語るかについても「言説の秩序」を形成している。話し手個人の談話・言説の中身は個人の属する社会の「言説の秩序」という文脈の中で最も正確に捉えられる。そこでは個人が社会の「言説の秩序」に縛られているか，その束縛から脱出口をどこに求めているかが理解される（言説の秩序について詳しくは児玉2004, 2006参照）。言説の秩序を分析しようとすれば，社会における言語の役割や言語の力も考慮せざるをえなくなる。

今日の意味論は分析対象を拡大して全体へ向かう気配はない。多くの分析は言説の秩序どころか，文と文のつながりにも至っていない。2007年10月，ある学会のシンポジウムにおいて４人が「接続」のテーマで発題し，命題（つまり節）を接続する標識（marker）である「それ」，when, since, ~ingなどを論じた。しかしそこでの結論は個別接続標識の意味やその構文にとどまり，接続の一般的なふるまいが提示されることはなかった。今日「接続」という確立した文法用語があるわけではない。命題と命題をつなぐものを「接続」と呼ぶとすれば，接続標識なしに文と文をつなぐことも一種の接続といえる。文と文のつながりは（15a-c）でみたように，諸言語で異なる。一般に英語は接続標識が欠けた高次表意を多用し，日本語はその意味を言語化する。諸言語により接続標識の有無が異なることに興味があるにしても，より重要なことは接続標識の有無や接続標識の意味ではなく，接続標識をもたない命題が文と文へどのように展開するかである。一般に文と文の間には，出来事の連続性や同時性，出来事の詳述や対比，因果関係，話し手の心的態度を示すモダリティなどの含意が埋め込まれている。ここには現実世界の知識，人間の認知，情報提示の順序のあり方がかかわってデフォルト解釈や橋渡し推論などが働いている（児玉2004:126,2006:53参照）。このような分析を進めることで接続標識のwhoをもつ次例も説明が可能になる。

（19）a. A man gave Mary a bunch of flowers who wanted to get married.
b. *A man gave Mary a bunch of flowers who was wearing a funny hat.
c. A man appeared who wanted to get married with Mary [who was wearing a funny hat].

（19a-c）においてwho節が先行詞のmanの直後に位置すればいずれも適格であるが，上例のようにwho節が先行詞のmanから離れ，外置した有標の構文では適格性が異なる。通常の語順を

破り外置した場合，その代償として主節とwho節の間には意味上厳しい制約が課せられるためである。（19a）は2つの節の間に出来事の因果関係があるため適格であるが，（19b）は因果関係が成立しないため不適格である。他方（19c）は2つの節が因果関係を示していないのに適格である。これは主節が（19a, b）と違って主語の出現（または存在）を表しているため，who節は「出来事の詳述」の一環として因果関係に限らずmanについて広範な記述が許されている。文と文または節と節をつなぐ意味関係を明らかにすることが接続標識の有無や接続標識の適格性を判断する鍵を提供してくれる。さらには文間のつなぎが段落や言説全体にどのように発展するかを考察することによって言語表現を介しての思考過程をたどる契機にもなるはずである。

最近は全体へ向かうどころか，むしろ部分へ向かっている。部分の分析についても問題がないわけではない。そのことは例えば動詞の意味を中心に文の分析を進めている語彙意味論にうかがえる。ここでは英語を対象に語彙概念構造で提案されている概念意味のCAUSEとBEをとりあげる。

（20）a. John opened the door.（ジョンがドアをあけた）[動作主]
b. The wind opened the door. (??風がドアをあけた）[自然の力]
c. The hammer opened the door. (*ハンマーがドアをあけた）[道具]
d. John accidentally opened the door. (*誤ってジョンの体がドアをあけた）[対象]
e. John [The wind, The hammer] caused the door to open.
f. John (etc.) CAUSE [$_{\text{the door}}$ BECOME [$_{\text{the door}}$ BE AT- [STATE:open]]]]

（20a-d）の英語の動詞openedは語彙的使役動詞，（20e）のcauseは分析的使役動詞と呼ばれる。（20a-e）はほぼ同義で概略（20f）の意味になる。（20f）のCAUSEは出来事の使役化を，BECOMEは変化を，BE (AT-) は状態をそれぞれ表す。実際に使われていない架空の抽象化された意味述語のCAUSEを仮定した（20f）によりCAUSERとして多様に異なる主語をもつ英語の文が統一的に解釈される。語彙的使役構文の（20a-d）と（20f）の多くの概念意味を語彙化した分析的使役構文の（20e）には現実に意味統語上の違いがあるが，その違いは文中の動詞が1つか2つかによって説明される。しかし問題は多様な主語の意味役割にある。（20a-d）の主語は末尾の[　]内の意味役割を有しているが，日本語で動詞「あけた」と結合しうる意味役割はその一部にすぎない。語彙概念構造が抽象化の過程で動詞の特性にのみ焦点をあてたためである。その結果，この分析は英語の語法にのみ適用され，普遍性に欠けるため日本語には別の枠組みを必要とする。（20a-d）でCAUSERの意味役割が異なるとすれば，（20f）のCAUSEの内容もそれぞれ異なるはずである。残念ながら名詞に付与される意味役割はGruber (1965, 1967) からほとんど進展していない。その結果，例えば同じ分析的使役構文でJohn made the door open.とした場合，その主語は（20a,e）のJohnと同じ動作主と分類されるにしても，ここにはCAUSERとしてより強い強制力が関与している。その含意の違いからJohn <u>deliberately</u> [*<u>accidentally</u>] made Mary lose her temper.やHe made me feel <u>miserable</u> [?<u>cold</u>].では（不）適格性に違いが出てくる。その違いは前者では下線部の副詞がmakeの強い強制性や意図性と整合するか否かにより決定され，後者では下線部の形容詞が心理的状態変化か身体的状態変化かで強制性の影響が異なるこ

とと関連している。CAUSEの語彙概念構造ではそのような違いを説明する道具立ては用意されていない。

次にBEについてみてみよう。語彙意味論では英語の動詞のうちbe, love, hate, wantなどは状態動詞，open, break, killなどは状態変化動詞と呼ばれる（例えば影山1996参照）。両者は共通した概念意味である状態のBEは（20f）からうかがえるように，[y BE (AT-z)]で表示され，状態変化動詞の変化は（20f）の[BECOME]によって表示される。しかし現実に状態動詞と状態変化動詞の「状態」は意味上異なる。状態動詞においては動詞が直接「状態」を意味するのに対して，状態変化動詞においては動詞が間接的に変化した「状態」を含意する。その証拠に英語の状態動詞は進行形に用いられず，日本語の状態述語（「好き，嫌い，ほしい」など）は目的語に「ガ」格をとることが可能であるなど，「状態」の意味が直接統語上に反映している。一方，状態変化動詞の場合，動詞が結果を含意するか否かは（14d,e）で示したように言語によって異なる。状態変化動詞のBEは英語に適用されるにしても日本語には別の枠組みが必要になる。語彙意味論は状態変化動詞にもBEを導入することによりVendler (1967) の提案した相（aspect）の分類に比べ，英語の多様な構文間の関係をうまく説明できる利点を有するが，ここでもまた普遍性があるとはいいがたい。

本節ではCAUSEとBEだけをとりあげたが，語彙意味論は動詞を特定の概念意味に還元化することにより，一方で英語の現象を統一的に説明できても，他方で他言語の多様な現象を捨象することになる。分析が言語の普遍性と多様性の実態を知るためには，還元化した要素が原子レベルか分子レベルであるかを明らかにしておく必要がある。原子が化学結合により合体した分子レベルの要素は異なる反応を示す。個別言語の概念意味はしばしば多様な要素（原子）を結合させた分子レベルのものである。特定言語の分子レベルの概念意味を他言語に適用した場合，必ずしも同じ分析結果を期待することはできない。それぞれの言語が固有の特質をもつことがあるためである。もちろん分子レベルのものがすべて普遍性に欠けるわけではない。§3.1でみたように，原素概念と同様に複合概念でも生得的・普遍的に習得されるものもある。その点，語彙意味論で提案されているCAUSE, BEは日本語などの他言語に適用不可能であり，生得的に習得される概念というより，むしろ英語固有の複合概念であるといえる。部分の個別言語に向けての分析も必要であるが，それは常により広い全体との関連で進めることが不可欠である。

次に社会言語学の問題に移る。これまで言語学が言語と社会の関係に眼を向けなかったわけではない。部分的ながら明治時代より言語政策や国語教育，言語生活の研究はなされてきた。「社会言語学」は広範な問題を含むため，対象領域が人により異なるとしても不思議でない。大学の教科書としてよく使われている真田（2006）の目次を見てみよう。

（21）序章

1　言語変種（属性とことば，場面とことば）

2　言語行動（ことばのストラテジー，ことばの切換え）

3　言語生活（生活とことば，民族社会とことば）

4　言語接触（方言接触，他言語との接触）

5　言語変化（音の変化，文法・語彙の変化）
6　言語意識（ことばのイメージ，ことばのアイデンティティ）
7　言語習得（幼児語，中間言語）
8　言語計画（国語教育，日本語政策）

上記とほぼ同じ章立てが真田ほか（1992），町田・中井（2005）にもみられる。各章内で扱われるテーマや執筆者が異なるだけである。真田（2006:9）によると，この章立ての枠組みは1980年代に設定されており，今日まで一貫して守られ，社会言語学の研究分野として定着しつつあるといえよう。そこで論じられている多くのものは多様な場面や地域で用いられる言語変種や言語使用の実態であり，桜井（2007）が指摘するように，言語生活研究の比重が大きい。本節の初めにみた「言説の秩序」についてはいっさい言及がなく，社会における言語の役割もアイデンティティとの関連で触れられているにすぎない。言語は思考形成や文化とどのような関係にあるのか，言語はどのように人を喜ばせ，欺き抑圧するのか，などについてこの種の本から知ることはできない。

東（2006）は日本の戦中戦後の歴代首相の言語行動を「社会言語学」の観点から詳しく検討している。そこでは演説の長さ，１文の長さ，「～ございます，～です；～いたします，～します」などの文末表現，抽象論か身近な話かなど，政治家の話すことば，話し方，ふるまい，話しことばのスタイル，表現法を診断している。数年前に「小泉劇場」を演出した元首相の魔力が何であったかも分析している。ここには「政治の世界で歴史的ななだれを起こしたのは，書かれたことばの力ではない。それは語られることばの魔力だけだ。」の格言を残したヒトラーの魔力につながるものがある。確かに話し方のスタイルが不特定多数の聴衆を引きつける重要な要素である。しかし表面的なスタイルだけで歴代首相の言語力を診断するのはまちがいではなかろうか。話術の巧みな人が常に真の「言語力」をもつわけではない。聴衆には情報を批判的に読み解くメディア・リテラシーが要請される。われわれは宴のあとのむなしさを経験したことが何度かある。話しことばのスタイルとともに演説の内容をどう分析・診断するかという課題がある。それとも演説の内容は社会言語学者の仕事ではないのであろうか。

言説の秩序，あるいは言語と思考・行動・文化の関係は（社会）言語学より言語人類学や社会学の文献に多くみられる。互いに棲み分けているためであろう。困ったことに，棲み分けるということは他人の世界に足を踏み入れず，互いに内向きに部分の世界にとどまることになる。

4．言語学と人文社会科学

言語学とその他の人文社会科学が分析対象とするものはすべて人間の関与する現象や出来事である。各専門領域によって焦点のあて方が異なるにしても，その分析法や視点に多くの共通点があってしかるべきである。人間が関与する現象や出来事を生み出す因子として次のものが想定される。

（22）人間の言動を生み出す因子

生得的な能力（言語能力・認知能力・文化形成能力など）――生後の経験を通して習得する事象解釈（体系をなす言語構造の言語知識，現実世界や対人関係などの知識）――言説の秩序・社会の秩序――社会・文化を構成する社会文化的コンテクスト（場面・制度・組織など）

（22）は児玉（2006:114, 120）の提案を修正統合したものである。各因子は言動の発生順序を示唆しているが，相互に関連しながら人間のふるまいを規定している。言語学や人文社会科学は同じ因子を対象にその相互関係を分析しているはずである。各因子について簡単に説明しておく。まず左端の生得的な能力は種としてヒトに遺伝的に埋め込まれているものである。例えば言語のいくつかの側面は脳構造に組み込まれており，遺伝子によって継承されている。生得性の範囲は定かでないが，ヒトに可能なものと不可能なものが確実に存在する。その能力のうち言語能力と認知能力のいずれが先に発達し，優先するかという問題があるが，ここでは触れない。次に生後に習得する事象解釈のうち言語構造についての言語知識は子供の臨界期頃までに無意識的に習得される言語知識と大人になるにつれ豊かになる言語知識の両方を示す。社会的な事象解釈の知識も同じように蓄積されていく。言語知識や社会的知識は個人により異同があるが，それは左辺の生得的な能力と次の言説[社会]の秩序の影響をうけるためである。ここには生得か学習か，遺伝か環境かという問題があるが，この点もここでは詳しく論じない。下條（1999:99）が指摘するように，徹底的な学習説をとれば学習自体が後天的といわざるをえないし，逆に徹底的な生得説をとればどこまでも「遺伝的」の意味を広げざるをえなくなる側面もある。（22）では思考に関する因子をあげていないが，思考はすべての因子の間で働いており，事象解釈と言説[社会]の秩序の間でも同様である。例えば言語の統語構造は名詞・動詞・時制などの単位からなるが，意味を介しての思考過程ではモノ・動作・時空・属性などの概念が形成されている。言説[社会]の秩序の「秩序」は§2.2でみたように，「整然とした状態」を示すものではなく，歴史的に形成された「様式またはスタイル」を示す。言説の秩序と社会の秩序は同じものではない。言説・談話・コミュニケーションはミクロレベルの現象であり，社会は経済・政治・文化などのより大きいマクロレベルのものである。言説の秩序は何を語り何を語らないかの問題もかかえており，社会の秩序を直接反映するものではない。しかし両者は密接な関係にあり，いずれも右端の社会文化的コンテクストが網の目のようにからみ合いながら言説や社会の安定をもたらしている。

言語学や人文社会科学が部分から全体に至る領域を分析しようとすれば，本来，（22）の両極の間にある諸因子の相互関連を究明すべきであるが，現実に言語論的転回後の両者は§1で概観したように，その分析対象が分離し棲み分けられている。言語学の対象は一般に左辺の生得的な能力や体系的な言語構造にとどまり，中央の言説の秩序にまで至っていない。言説・社会の秩序や社会文化的コンテクストなどを考慮しているものは批判的談話分析（Critical Discourse Analysis，略してCDA）などに限られている。一方，人文社会科学が対象とする因子は右辺の社会の秩序や社会文化的コンテクストおよび生後の経験を通して習得する社会事象の一部にとどまり，左辺はほとんど検討されていない。ただしFoucault (1969, 1971) による言説分析の衝撃は大きく，最近，特に社会学においては言説の秩序も対象にされるようになった。

社会学では1990年代以降，構築主義（constructionismまたはconstructivism）が盛んになっている（遠藤2006参照）。そこでは社会の構築は言語を介してのみ行なわれ，社会問題は言語問題であるとみなされている。ことばで意味が与えられることによって実体が切り分けられ存在する，つまり世界がことばで表現されるというよりも，ことばが世界を構成しているとみなしている。この立場は言語学者では「人がことばを用いるより，ことばが人を用いている」と論文の冒頭で述べたR.Lakoff (1973) や「現実が言語より前に存在して言語を形成するのではなく，言語があってはじめて現実が形成される」というCDAのFairclough (1989) などと共通している。ここでの「ことば」や「言語」は「言説（の秩序）」とも言い換えできよう。橋爪（2006）によると，言説分析を進めようとする社会学の動向は「知識や観念といった，社会の背後にあって社会を実質的に構成する，不可視的な実態について考察」しており，これまで実証主義にこだわり目に見える具体的な行為や実態を対象にしていた社会学の標準的な方法とは異なることになる。この点では社会学が言語学（特にCDA）に接近しているといえるが，今なお両者の間には隔たりがある。§１では言語や諸事象が，まるで人間の生得性と無縁なものであるかのように，社会的産物であると断じた上野（2001）や赤川（2006）を批判したが，二人とも構築主義を支えている社会学者であり，生得性を軽視している点，（22）の右辺への片寄りがみられる。一般に言語学と社会学の隔たりは用語にもうかがえる。英語のdiscourse analysisを日本の言語学は「談話分析」，社会学は「言説分析」と呼んでいるが，これは分析対象の違いを反映している。言語学が（22）の左辺においてdiscourseの言語表現を中心に分析するのに対して，社会学は（22）の右辺において discourseと社会の関連で価値観や信念体系を含む社会問題を対象にしている。言語学と社会学には分析対象や分析方法をいかに統合するかという課題が双方に残っている。

構築主義が（21）の右辺への片寄りをみせていることは本質主義（essentialism）との対立にもうかがえる。本質主義が物事には変化しがたい普遍的な本質があるとするのに対して，構築主義は普遍や本質などの認識は社会文化的に構築され，可変的なものであるとする。この立場はポストモダニズムやポストコロニャリズムとつながるものでもある。例えば性差やセクシュアリティは遺伝的・生得的なものか社会的・歴史的なものかで議論が分かれる。しかし単純に二分してそれぞれ本質主義や構築主義の証拠としてもあまり意味がない。特性のうち一方が優勢で他方が劣勢であるにしても，劣勢の方が消失するわけではない。両者をいかに統合するかが分析上重要であるが，人文社会科学は統合の方法をまだ見出していない。

これまで言説の秩序は歴史的に形成されたものであると繰り返し述べているが，ここでの「歴史」には注釈が必要である。言説の秩序がすべて歴史的に形成されるというものではない。言語が生得的能力に由来する面をもつだけに，言説の秩序は一方で諸言語に共通する非歴史的な要因に支配され，他方では歴史的に社会文化的コンテクストの影響をうけることになる。歴史が直接言語に反映するわけではなく，また歴史が常に一貫した流れをもつわけでもない。歴史そのものの見直しも常に行なわれている。例えば第二次大戦を記録した日本史の検定教科書は「侵略」を「進出」に変えたり，従軍慰安婦問題や沖縄戦での集団自決について従来認めていた日本軍の関与を削除したりしている。わずか60年余りの短い歴史の中でも記述が変化している。歴史の記録がその時どきの「力」関係で変化するとしたら，歴史の記録そのものに一貫

性があるわけではない。矛盾した記録や事実の見方の「揺らぎ」を含め，時間的経過の中で一定の方向に駆り立てていく流れを「歴史」とみることができよう。Sapir (1921) がかつてdrift（駆流）と呼んだものに近い。

不可視的な観念において絶対不変のものは少ない。われわれは何をもって合理的・理性的とするかは必ずしもよくわかっていない。宗教によって何をタブーとするか，何をよしとするかも違っている。法は正義を実現するものといわれるが，現実に正義はそれを執行するために力として法を要求し，法は正義の名においてその力を獲得しており，相互依存の関係にある。絶対的な正義が存在するわけではなく法にも多くの限界がある。人間社会では巷間行なわれる慣習が法になり，遺伝的なおきてからなる動物社会と異なるともいわれるが，Jackendoff (1993:212) が指摘しているように，人間社会も親族関係，集団帰属性，（攻撃性を含む）優位性を社会の原動力とする点では，動物社会と変わらない。例えば広義の親族関係は人種差別や人種偏見として現れ，集団帰属性はナショナリズムとして，優位性は政治・軍事・経済の競い合いとして現れる。今日，人は高度消費社会の中にあって自己の利益のみを追及し，その欲望をコントロールする力を失いつつある。社会全体の利益実現のためには互いの連帯や共生などが重要になるが，法や社会は人間の生得的な特性を社会全体の連帯・共生などと統合させる方策をまだ見出していない。

経験科学の仮説（理論）が「科学」であるためには明示的であることが要請される。仮説は20世紀後半より偽であれば偽であると反証できること，つまり反証可能性（falsifiability）を備えていることが不可欠の条件であるとみなされるようになった。反証可能性が高く，かつ実際には反証されないとき，その仮説は高い評価を得ることになる。例えば「自然は神の摂理に支配されている」という命題は宗教上はありえても，経験科学としては「神の摂理」があいまいなため反証可能性に欠ける。また「カラスは黒いか，あるいは黒くない」という命題は論理形式上常に真であるが，原理的に何も提言していないため仮説として無意味であり反証不可能となる。経験科学の理論は偽を修正することによってはじめて真の世界に近づくことができると考えてきた。これに対して現実の政治は人々の生活を守り改善すると公言しているが，あいまいで矛盾した言説が堂々とまかり通り，歴史的に同じ誤りが繰り返されている。何とでも解釈できるスローガンを掲げたり，争点をズラシて説明責任を回避したり，二重基準を弄したりする言説である。確かに政治的にはどんな課題もすぐに実現できるわけではない。多様な施策に優先順位をつける場合，当面の施策が長期的施策と矛盾することがあるかもしれない。しかしその場合はその状況を説明していずれの施策が妥当であるかを問えばすむことである。もちろん反証能性の欠如は政治に限らない。政治の言説もわれわれの日常的言語活動の反映にすぎないためである。

これまで言語を通して人間どうしの交流を対象に考察してきたが，この交流が行なわれる空間は地球上であり，さらには宇宙にも広がっている。より大きい全体としては自然の中に人間の言動を位置づける必要もある。人間が関与する現象には多様な原則が競合しながらそれぞれの全体を形成しており，その現象を解決する方策は決して容易ではない。(22) は全体と部分を整合させるための１つの見取り図である。より広い全体としては，(22) のほかに人間の言動が行なわれる環境である自然も含めて多様な因子が存在する。さらに各因子にはそれを構成する

下位類の因子も存在するはずである。そうした因子相互を関連づけることによってはじめて全体と部分をつなぐことができよう。

5．全体と部分の整合性

全体は部分の総和ではなく，また総論賛成各論反対というように分析上全体と部分の間にズレが生じることがしばしばある。その原因は，第1に§1の初めでみたように，全体の上限と部分の下限が定かでなくあいまいなためであり，第2にあるものの全体は多様な他のものの全体またはその一部と密接に結びついており全体として固有の原理を有しその部分の総和と異なるためである。全体と部分のズレは現象においても分析においても不可避的なものである。全体と部分はズレを有しているものの，それぞれの要素が全体でもあり部分でもあるという二重性をもつホロン構造をなしながら社会システムを安定させている（ホロン構造については児玉2006:90参照）。システムの全体と部分，または部分間のズレが許容範囲を超えて大きくなったとき，社会は全体と部分を再編成していく。

問題は不可避的に矛盾をもつ全体と部分の間にどのような整合性をもたせるかということになる。部分間の局所的一貫性は可能であるにしても，全体間または全体と部分間の全体的一貫性を得ることは困難である。全体と部分間の乖離をできるだけ少なくするためには，全体から部分に向けてのトップダウン的分析と部分から全体に向けてのボトムアップ的分析を反復しながら全体と部分間のズレを修正し，全体と部分の情報を統合する必要がある。この過程は脳内の心的過程にも対応している。

20世紀後半後の言語学は自然科学や形式主義の影響をうけ，厳密化にこだわり，分析対象を狭く限定してきた。その結果，言語分析の究極の目的を忘れ，自己の狭い領域の研究を目的化し，社会における言語の全体像に目を向けようとしなかった。Chomsky (1993:15) も「専門化するのは進歩の証ではない。技術的な小手先の処理に腐心するあまり洞察ある課題から目をそらすことがしばしば起こる」と指摘している。「専門化する」（specialize）ということは基本的には研究領域を特定化することであり，さらに「専門化」を進めると研究領域をより狭くし，あげくは「ネズミのしっぽ」を研究しても博士号を得ることになる。専門化より重要なことは全体と部分の情報をどのように統合するかである。トップダウン式分析とボトムアップ式分析を融合させるというだけでは解決にならない。分析法においては§2.1や§3.1でみたように，高次の全体から低次の部分に至る階層性が原理原則に存在し，分析対象においても普遍的なものから多様性を示すものへの階層性が人間の諸現象に存在するはずである。§4の末尾で絶対不変のものは少ないと述べたが，これは普遍性を否定するものではない。かつてEagleton (1996,森田訳73参照）は普遍性・客観性・真理といった古典的概念を徹底的に疑う主張をポストモダニズムと呼び，その主張を次のように批判している。

(23) ポストモダニズムが独善的なのは，普遍に反対する立場を普遍化していることであり，共有された人間性という概念を，まったく無意味なものと結論づけていることである。たとえば，拷問がおこなわれたとき，拷問に反対する理由は，犠牲者もわれわれと普

遍的人間性を共有しているというだけで十分なはずである。

こうした普遍性の多くは（22）の左端の生得的な能力に由来するものである。

言語学を含む人文社会科学が究極の研究目標を達成するためには，全体と部分の関係を見直す必要がある。そのためには現在の分析対象を拡大し，（22）であげた諸因子の相互関連を視野に入れ，人文社会現象の普遍性と多様性を究明することが要請される。（22）の全域に応えようとすると，言語学は当然のことながら価値観や信念体系なども考慮することになる。価値観や信念体系などが言説の中核をなすためである。このような課題に応えることで言語学は論理学の呪縛から抜け出ることができるであろう。言語学を除く人文社会科学も（22）の左辺へ分析対象を拡大することにより（1）でRussel (1979) が嘆いた状況を克服し新しい地平を拓くことができよう。

引用文献

赤川　学. 2006.『構築主義を再構築する』東京：頸草書房.

東　照二. 2006.『歴代首相の言語力を診断する』東京：研究社.

Bloomfield, L. 1933. *Language*. London: Allen & Unwin.

Brϕgger, F.C. 1992. *Culture,Language, Text*. Oslo: Scandinavian University Press.

Chomsky, N. 1957. *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton.

————. 1987. 'Language in a psychological setting.' *Sophia Linguistica* 22:1-73.

————. 1993. *Language and Thought*. Wakefield: Moyer Bell.

Eagleton, T. 1996. *The Illusion of Postmodernism*. Oxford: Blackwell.（森田典正訳1998『ポストモダニズムの幻想』東京:大月書店）

遠藤知己. 2006.「言説分析とその困難——全体性／全域性の現在的位相をめぐって」佐藤俊樹・友枝敏雄（編）『言説分析の可能性』27-58.東京：東信堂.

Fairclough, N. 1989. *Language and Power*. Harlow: Longman.

Fodor, J.A. 1981. *Representation: Philosophical Essays on the Foundations of Cognitive Science*. Brighton: Harvester Press.

————. Fodor,J.A., M.F.Garrett, E.C.Walker and C.H.Parkes. 1980. 'Against definition.' *Cognition* 8 (3) :263-267.

Foucault, M. 1969. *L'archeologie du savoir*. Paris: Gallimard. （中村雄二郎訳『知の考古学』1981, 東京：河出書房新社）

————. 1971. *L'ordre du discours*. Paris: Gallimard. （中村雄二郎訳『言語表現の秩序』1972, 東京：河出書房）

Francis, E.J., and L.A.Michaelis (eds.) 2003. *Mismatch: Form-Function Incongruity and the Architecture of Grammar*. Stanford: CSLI.

Fujita, K. 2007. 'Facing the logical problem of language evolution.' *English Linguistics*. 24 (1) :78-108.

Gazdar, G. 1979. *Pragmatics: Implicature, Presupposition, and Logical Form*. New York: Academic Press.

Grice, H.P. 1975. 'Logic and conversation.' In P.C.Cole andJ.L.Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Act* 41-58. New York:Academic Press.

————. 1989. *Studies in the Ways of Words*. Cambridge,MA: Harvard University Press.

Gruber, J. 1965. 'Studies in lexical relations.' (Doctoral dissertation, MIT). In Gruber (1976) 1-21.

————. 1967. ‘Functions of the lexicon in formal descriptive grammars.’ In Gruber (1976) 211-367.
————. 1976. *Lexical Studies in Syntax and Semantics*. Amsterdam: North-Holland.
橋爪大三郎. 2006. 「知識社会学と言説分析」佐藤俊樹・友枝敏雄（編）『言説分析の可能性』183-204. 東京：東信堂.
ホライス，H.「生物学者たちの還元主義vs反還元主義」『大科学論争（最新科学シリーズ）』46-53. 東京: 学習研究社.
Jaszczolt, K.M. 2005. *Default Semantics*. Oxford: Oxford University Press.
影山太郎. 1996.『動詞意味論――言語と認知の接点――』東京：くろしお出版.
カタラーノ，P. 1998. 「還元主義者の見果てぬ夢？」『大科学論争（最新科学シリーズ）』32-45. 東京：学習研究社.
児玉徳美1987a.『依存文法の研究』東京：研究社.
———— 1987b.『語順の普遍性』京都：山口書店.
————. 2002.『意味論の対象と方法』東京：くろしお出版.
————. 2004.『意味分析の新展開――ことばのひろがりに応える――』東京：開拓社.
————. 2006. 『ヒト・ことば・社会』東京：開拓社.
————. 2007.「依存関係の見直し」『立命館文学』601:35-49.
————（準備中）.「デフォルト解釈の見直し」
Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press.
Lakoff, R. 1973. ‘Language and woman’s place.’ *Language in Society* 2:45-80.
町田健・中井精一. 2005.『社会言語学のしくみ』東京：研究社.
Pustejovsky, J. 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA:MIT Press.
Russel,R.L. 1979. ‘Speech acts, conversational sequencing, and rules.’ *Contemporary Sociology* 8:176-179.
Said, E. 1978. *Orientalism*. Hamondsworth: Penguin Books.
桜井　隆. 2007.「日本の社会言語学：その歴史と研究領域」『ことばと社会』10:25-40.
真田信治（編）. 2006.『社会言語学の展望』東京：くろしお出版.
真田信治・渋谷勝己・陣内正敏・杉戸清樹. 1992.『社会言語学』東京：おうふう.
Sapir, E. 1921. *Language: An Introduction to the Study of Speech.* New York: Harcourt, Brace & Co.
Saussure, F.de. 1916. *Cours de linguistique générale*. Paris:Payot.
柴田正良（訳）.1997.『意味の全体論――ホーリズム，そのお買い物ガイド』東京：産業図書.（原著：J.Fodor and E.Lepore, *Holism: A Shopper’s Guide*, 1992, Oxford: Blackwell）
下條信輔. 1999. 『＜意識＞とは何だろうか　脳の来歴，知覚の錯覚』東京：講談社新書.
Sperber, D. 1996. *Explaining Culture: A Naturalistic Approach*. Oxford: Blackwell.
Steiner, G. 1967. *Language and Silence*. Hamondsworth: Pelican Books.
Tesnière, L. 1959. *Éléments de syntaxe structurale*. Paris: Klincksieck.
内田聖二. 2007.「時枝文法と認知語用論」22:1-9.『人間文化研究科年報』（奈良女子大学大学院人間文化研究科）.
上野千鶴子（編）2001.『構築主義とは何か』東京：頸草書房.
Vendler, Z. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, New York: Cornell University Press.
Wilkin, P. 1997. *Noam Chomsky: On Power, Knowledge and Human Nature*. New York: St. Martin’s Press.
安井　稔. 2004.『仕事場の英語学』東京：開拓社.
吉田和男. 1989.「ホロン構造の日本型社会システム」濱口恵俊（編）『日本社会とは何か　＜複雑系＞の視点から』68-95. 東京：NHKブックス.
Zwarts, F. 1995. ‘Nonveridical contexts.’ *Linguistic Analysis* 25:286-312.